在日インド人の社会適応と言語適応

Aashlesha Marathe(筑波大学大学院生)

1. はじめに

本稿では在日インド人の社会適応プロセスに着目し,言語の壁を乗り越える段階に関するデータを取り扱う. . 在日インド人に関するこれまでの調査には次のようなものがある. 沢 (2007) の調査では, 2000 年以降,東京江戸川区に在日インド人が増加し,インド人コミュニティ「Little India」を作ったことが指摘されている.江戸川区には在日インド人が一緒に祭り等を楽しみ,快適に過ごすコミュニティがある一方で,彼らは仕事以外に日本人とは接触がない.Wadhwa (2020) の調査によれば,日本で生活するインド人にとって,インド人の友達がいないと,非常に孤独を感じるという.吾妻 (2018) は,在日インド人の中の,シク教に従うインド人の調査を行った.その調査から,シク教のインド人は,日本の文化を理解できず,言葉の壁のため,日本の社会に適応できない現状があることが分かった.同じように,江戸川区のインド人をはじめとする外国人は,日本語ができないため,日本人とは関係づくりができず,「Ethnic Enclave」(民族の飛び地) にいる方が快適だと思われている.

このような現状がある一方で,日本語を学習した在日インド人の日本社会への適応と関係づくりに関する研究は少ない.「在日インド人」という括り方もインド社会の多様性を反映してはおらず,均質的な「インド人」「インド社会」を連想させてしまう可能性もある.そのために,本稿では話者の言語ごとに対象を設定した.本稿では,在日インド人全体ではなく,マハラシュトラ州出身でマラティー語母語話者の在日インド人にフォーカスし,言語の壁による社会適応のプロセスについてのデータをみていく.

2. 研究対象と方法

2.1 研究協力者

本研究の協力者は, 20 代の在日マハラシュトラ州出身者 11 名 (男性 5 名,女性 6 名) である. 日本在住歴は 2 年から 8 年,居住地域は東京 6 名,千葉 1 名,神奈川 1 名,名古屋 2 名と大阪 1 名である.職業は様々だが, 日本語レベルは全員 N2 以上であり,仕事で日本語を使った経験をもつ.[1]

2.2 研究方法

研究方法として, 半構造インタビューを行い,日本在住の経験,社会適応,言語による問題,言語の壁を乗り越えるプロセス,日本人との関係づくりについて詳しく話を聞いた.インタビューデータを文字起こしして MAXQDA (2022) のソフトウェアを使い,質的分析を行った.

3. データと考察ー言語の壁を乗り越えるプロセス

本研究調査から,在日インド人の社会言語適応のプロセスは五段階に分かれていることがわかった.第一はカルチャーショックと不安,第二は言葉の壁を乗り越えるプロセス,第三は日本人との接触及び関係づくり,第四はインタラクションのアジャストメント,第五はサードカルチャーづくり[2]である.第二の言語の壁を「ある程度」乗り越えると,関係づくりがより快適になるのだが,言語の壁は第二段階に限るものではなく,どの段階にも影響を与えることが明らかになった.本稿では,以上の段階にかかわる言語の壁を乗り越えるプロセスに関するデータを明らかにする.

3.1 言語の壁

本研究調査から明らかになったように, 社会言語適応プロセスの第二段階は, 言語の壁が中心になる. ホスト社会とコミュニケーションができないために,移民の自信とモチベーションが低下し,社会適応にも悪い影響がある.帰属意識がないため,体調とメンタルヘルスにも支障をきたす (Lou & Noels, 2017).本稿では, 言語の壁とは言語能力のレベルのために, コミュニケーションができないことを指す. 言語能力には語彙,文法だけでなく,社会文化的能力もあるため (Neustupný, 2005),社会適応に大きくかかわる.このように言語の壁に対する姿勢は異文化交流と文化適応に影響を与える.言語能力が低いため,ネイティブの人から嫌がれると思い込む「Language-based rejection sensitivity (言語を基にした拒否感度)」も指摘されており,この Language-based rejection sensitivity が高いほど,異文化適応が難しいとされている(Lou & Noels, 2017).

---

[1] 本稿では協力者の名前の代わりに番号を使用し,番号の後ろにF (女性) かM (男性) でジェンダーを表す.例えば,2M は協力者 2 の男性を表す.

[2] サードカルチャーづくりはCasmir (1999) の研究で紹介された概念である.

3.1.1　言語の壁との直面

来日後,異文化適応が始まり,新しい環境の影響でカルチャー・ショックになることもある.カルチャー・ショックとは,それまで「獲得してきた生活上の礼儀作法や習慣,規範等が異文化社会において通用しないことから生じる不安感」(Oberg, 1960) と定義される.カルチャー・ショックになる一因として,言語の壁によりコミュニケーションがとれないことが挙げられる.協力者の話からは,日常会話レベルの日本語ができても,職場での日本語が理解できず,自信がなくなる,という声も聞かれた.協力者 11 名のうち 7 名が,来日前に N2 を合格していた.しかし,インドにいるときの日本語とのかかわりは,週 3 回 1 日 2 時間程度の日本語の授業に限り,それに比べて,来日後は「最初はずっと一日中日本語で話すストレスが一番高かった」(1F) という.同じように 10F は「最初の 4 か月,パソコンの機能まで日本語で,何も読めなかった.私が働いている部署も,外国人に慣れていなくて,英語はゼロだった」と話す.ほとんどの協力者が最初の半年ぐらいは,この言語の壁によるストレスで大変だったと述べていた.

Falsgraf et al (1993) によれば,日本語のレベルによる問題が様々で,中級レベルの人は情報を得るのに困ることが多い一方で,上級レベルの人は語彙,漢字,専門用語に加えて,日本語でのプレゼンテーションを聴き取ることにも困難を感じ,その都度日本人に頼ねることも躊躇するという (Falsgraf et al, 1993).カルチャー・ショックのため,日本語能力が退行することもあり,3M は「来日前に N4 まで勉強していたが,カルチャーショックのため,平仮名さえ読めなくなり,すごく悩んでいた」[3]と述べた.自信がなくなる理由の中には,周りの人の日本語能力が高く,自分だけができない感覚がある.6M は「同僚にはベトナム人,ミャンマー人,中国人がいて,みんな N1 取っていて,日本語ばかりの環境だった.僕は N3 であまりできなくて,周りの人ができるが,僕だけができないと自信をなくしていた.本当に日本に来てよかったのかと悩んでいた」と話していた.

3.1.2 日本語独特の言葉遣いによる壁

外国語でコミュニケーションの壁に直面することはだれにでもあるが,協力者のうち何人かは日本語独特の問題について語った.協力者の母語であるマラティー語には敬意レベルが二つあり,日本語の話し言葉と丁寧語と敬語を間違える人が多い.インタビュー調査からは「話し言葉を使おうとしても間違える.同期にも丁寧語を使ってしまい,先輩に対して「る」形を使うこともたまにある」(4F),「日本人が話していると,「は」を使わないね.主語を使わないし,ジェンダーを表す表現もないため,話のテーマも理解できず,会話に乗っていけないことが最初のころはよくあった」(10F) などが聞かれた.

3.2　日本人との接触及び関係づくり

どの関係づくりでもコミュニケーションが鍵となるので,日本人との接触においても言語が最も大事なポイントとなる.外国人と日本人が親しい関係を作れない原因として,言語の壁をあげた.言語の壁は,外国人側が日本語ができないためでもり,また日本人側が英語ができないためでもある.言語の壁による関係づくりの問題もある一方で,言語の壁をきっかけに日本人と親しい関係が作れた経験もある.したがって, 言語の壁は必ずしもマイナスの影響を与えるわけではない.言語の壁はいずれの場合にも,コミュニケーションの鍵となり,関係性づくりに大きな影響をもたらす.

3.2.1 言語の壁による関係づくりの問題

協力者の話からは, 職場でのコミュニケーションにおいて, 言語が理解できないうえに, 同期に頼ることを恥ずかしいと感じていることがわかった.「いちいち聞くのが嫌で, 自尊心が傷つく」(10F).仕事には専門用語の知識が必要である.4F は, 職場で電話対応ができなかったため, 同僚の仕事を 2 倍にさせてしまった経験について語った.リーダーとの仕事の相談では,一生懸命説明をしているのに,「4 ちゃんが言いたいことが全く分からない」と直接言われる.それを違う言葉で試してみることを繰り返してみても,「いや..この日本語だと全然わからない」と言われ,「こんなに頑張っているのに,何もわからないと言われたら泣きそうになる」という. また, 最初のころ, 先輩にお願いされたことを理解できていると勘違いして,違うことをしてしまった経験も何回かあったという.これに対し,9F は,「もう 2 年だから,仕事上の会話が問題がなくなっても,仕事以外の会話になると,乗っていけない.日本語だと,頭の中で文を作ってから話していると,話が自然ではない」と述べた. 別の協力者も同様の経験をしており, 最初は同期が話していると,内容が理解できず,仲間外れになると述べた.そのうえ,文化の壁もあり,協力者の何人かは,昔の日本のドラマ,日本のミュージカルについて話していると興味もないし,理解もできないと話した. 最初は, 噂, 冗談等が分からなかったとしても, 日本人がそれを理解し, 説明をしてくれる.一方で, この説明によって仲間外れになることもあるが, 説明により, 関係づくりができることもある.

3.2.2 言語の壁をきっかけにした関係づくり

上記の通り,言語の壁をきっかけとして,関係づくりができる. 関係づくりの例としては, 日本語を教えてもらうかわりに, 英語を教えるといった言語交換の機会がある.3M は会社で「日本語英語勉強会」を作り,週一回昼休みの時間,英語と日本語で様々なテーマ (例えば,異文化,旅行の経験,政治,会社の政策等) についてについて話をする機会を設けた. その結果,お互いの観点が理解できる.最初は日本人が意見を主張できないため困ったという.だんだん,日本人にとっても意見をいいやすい場となり,個人的な話もできるようになったという.また,11M はシェアハウスに住んでおり,周りに外国人も多く,共通言語が日本語であるという. シェアハウスでは, 共用の台所を使って皆で料理をし, 料理を作りながら, 料理に関する言語の壁を調べたり, 様々なテーマについて話したりして, 聴解と会話能力が高まったという.そのほかに, 8F の

[3] 本稿でのインタビュー調査からの引用はすべて,マラティー語から意味を変えずに日本語に訳したものである.

会社の規則では，日本語の勉強として，日報を書く必要があり，その際にわからない単語を同期に教えてもらったりしたという.研修の時に使った日本語が分からなくて，課題もわからない.そのため，簡単な言葉で説明してもらったり，自分が言いたいことをきれいな日本語に直してもらったりしたという.「今でも漢字が苦手で，同期に読んでいただくことが多い」という.1F の会社の先輩の話し方はそもそも難しい語彙を使う話し方だったが，最近，先輩のほうでも１F がどのぐらい把握できるかが分かるようになった.「雑談のときに彼は難しい単語や俗語を使ったら,一緒にそれを調べて,教えてもらう活動を最近やっている」という.

3.3 個人的な努力によって言語の壁を乗り越えるコツ

8F は「言語の壁を乗り越えるプロセスには会社と周りの日本人のサポートが大事だ」という．会社では最初の数ヶ月，日報を書く必要があり，それを周りの人にチェックしてもらい，間違いを直すようにお願いしているという.3M と 6M の会社からは日本語学習の支援もある．3M はその日本語の授業では，日本語能力試験に向けた勉強があって役に立たないと思い，先生にお願いして，会社の話をするようにしたという.また，日本語のドラマをエンターテインメントのためではなく，勉強のために見たり，セリフを繰り返す勉強をしたという．1F は，ドラマから学んだ新しい単語を誰かと使ってみるようにしたと話した．4F の会社には朝礼の時，「哲学手帳」[4]から発表することになっている.それをきっかけに,頑張って日本語を使うようにしたという．これらのデータからは,日常の出来事を「日本語の勉強の機会」と捉えることが大事なのだとわかる.協力者のほとんど全員が，何かわからないときに質問してちゃんと説明してもらう習慣を作ったと述べていた.

3.4 インタラクションのアジャストメント

インタラクションのアジャストメントに至るのは言語能力が高まるからとは限らない.日本語の勉強をしたり,ドラマを見たり,語彙を増やしたりして流暢になるうえ,上記のコツを使いながら動くこともある.自分の言語能力を認め,自信をもって動くようになるのが社会言語適応になる.次の 6M の話からそう思われる.「前は日本語もできなかったし,自信もなかった.今は能力はないが,自信はある.間違えてでも話す.今でも間違いがたくさんあると思うが,相手がわかるし,私も相手の話が分かる.前は 50%理解だったら,今は 80%だ」と 6M がいう.つまり，日本人と接触するほど,コミュニケーションが楽になり,相手との理解が高まる.結果として,自分の能力に自信を持つようになる.

自信を持つようになる理由としてもう一つ挙げられたのは,日本人の立場に立ってみることだ．日本人も英語が 100 パーセントではないし，自信がないから「私だけができないということではない．日本人は英語で話すときに,私たちよりも自信がなくなるし，「外国人と話すことをもっと怖がっているから心配しない方がいい」と 8F がいう．社会言語適応には外国人特典も含まれる.例えば,レポートがよくできなかったときに，例えば,レポートがよくできなかったときに「日本語が分からなくて間違えました」(4F) と言えるなどがある.

社会言語適応のプロセスをみると，最初の段階では,日本語能力を高めるために頑張るのがふつうである.一方，日本 3 年目の 1F は第四に至ると，言語を頑張るより自分の日本語レベルに自信を持つようになり，「ある程度日本語ができるようになったので,英語の環境に行きたい」という.また，「最近,英語が分かる人に英語でメールをするようにしている」と述べる.

日本在住 5 年目の 10F は専門用語がわからなくても会話ができるという.「もう言語の壁はないが,もちろん,例えば..新聞を読まないから政治の言葉が分からないこともある.いきなり政治心の話になったらわからない.だから,政治を知っている人が使う言葉がつかえない.でも,今の段階では,違う言葉で表現できる.だから,言語は壁じゃないけど,適当な言葉がたぶん壁.興味がないから専門用語がわからない.でも,表現ができる.」

3.5 日本人との積極的な関係

第四段階まで乗り越える過程から,コミュニケーションがスムーズになる.言語ができるようになったら,積極的に会話ができる.9F は美容室に行ったときに,美容師とお喋りしているという.最初は仕事以外の会話が難しいと思っていた 9F だが,最近,自然に話せるのがうれしいという.協力者の何人かは,日本人と世間話ができるくらいの関係がないと話していた.会社の人のうわさ話,悩み相談までできるようになった人は 11 名のうち 2 名しかいない．そのうちの 6M の話によれば，6M は皮肉屋で職場でも皮肉のある話をすることが多く，最初，同僚の日本人は理解できなかったが，今ではよく理解して笑っているという.

4. おわりに

本稿ではインタビューデータから言語の壁と社会適応に関するデータを示した.日本語を勉強してきたから社会適応は難しくないと思われやすいが,上記のデータからは,言語の壁による社会適応の問題が様々あることがわかった.今後も,日本人との関係づくり,社会適応の経験と日本での社会生活に関するデータをまとめていく.

謝辞　本稿の執筆にあたって狩野裕子さんから日本語のネイティブチェックをいただきました.協力費として指導教員の明石純一先生から予算をもらいました.博士研究を行うにあたって,指導教員の明石純一先生,副査の井出里咲子先生から指導をいただいています.心から感謝申し上げます.

[4] 4F の会社には哲学的なストーリー，ことわざが書いてある本がある.朝礼では，その本からテーマを選び，短いスピーチ又は話しをする習慣がある.

参考文献

Agullo, B., & Egawa, M. (2009). International careers of Indian workers in Tokyo: Examination and future directions. Career Development International.

Azuma, M. (2018). Sikh Diaspora in Japan. Routledge.

Falsgraf, C., Fujii, N., & Kataoka, H. (1993). English speakers in Japanese work environments: An analysis of Japanese language functions and needs. The Journal of the Association of Teachers of Japanese, 27(2), 177. https://doi.org/10.2307/488924

Ishii, Y. (2021). How are the Japanese Characteristics and their working styles perceived by highly skilled Indian Office Workers? [Unpublished master's thesis]. University of London

Lou, N. M., & Noels, K. A. (2017). Sensitivity to language-based rejection in intercultural communication: The role of language mindsets and implications for migrants' cross-cultural adaptation. Applied Linguistics, 40(3), 478-505. https://doi.org/10.1093/applin/amx047

Marathe, A. (2022, November 26). The social life of Indians in Japan: Indian and Japanized aspects of Maharashtrian people. Presented at the SIETAR Japan 37th Annual Conference. Online.

Neustupný, J. V. (2005). Foreigners and the Japanese in contact situations: Evaluation of norm deviations. International Journal of the Sociology of Language, 2005(175-176). https://doi.org/10.1515/ijsl.2005.2005.175-176.307

Oberg, K. (1960). Cultural shock: Adjustment to new cultural environments. Practical Anthropology, os-7(4), 177-182. https://doi.org/10.1177/009182966000700405

Sawa, M. (2007). 外国人労働者. In 地理学概論 (pp. 118-122). Asakura Shoten.

Wadhwa, M. (2020). Indian Migrants in Tokyo: A Study of Socio-Cultural, Religious, and Working Worlds. Routledge.

Wanmali, S. V. (1999, July 26). Maharashtra. Encyclopedia Britannica. https://www.britannica.com/place/Maharashtra